
けいおん！あったかい日常

SIN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！あつたかい日常

【Nコード】

N6241Z

【作者名】

SIN

【あらすじ】

中学時代にいじめにあい心に深い傷を負った・・・地元の高校には行きたくなかった為悩んでいたところ、母親に勧められたのが隣の桜ヶ丘高校。受験を受け合格し入学したまでは良かったが・・・この高校は実は女子高で、俺の年から共学になり今年の男子生徒は俺一人と言った・・・「なんじゃそりゃあああああああ！？」。だけど俺はここでかけがないものを手に入れるのだった。

プロローグ(前書き)

小説書き始めました、もの凄く素人で更新も不定期ですがあたたかく見守っていて下さい。

プロローグ

春は出会いの季節……

訪れるのは友情なのか……

それとも恋なのか……

凄く不安だけど

それと同時に少しだけ期待してしまう自分がある

過去に嫌なこと、怖いこと、傷ついたこと……

泣きたくて逃げ出してしまういたい思いもあったけど……

ここで俺は出会えたんだ

本当の友達に……

大好きな人に……

これから始まる物語は

この俺野上慎司と

この学校で出会った少女達の

いつもの日常だけどもあつたかい物語

けいおん！あつたかい日常

L I V E s t a r t ! !

プロローグ（後書き）

これから頑張ります

LIVE 1 高校入学！だがしかし・・・（前書き）

ようやく本編スタートです、ではお楽しみください。

LIVE 1 高校入学！だがしかし・・・

ピピピッ ピピピッ

目覚まし時計の音を聴きながら眠い目を擦り
俺は目を覚ました・・・

「ふぁ・・・ねむ・・・」

ぐぐつと背伸びをしてほつと一息。そしてハンガー
に掛けてある制服に手を伸ばし着替えを始める。

「慎司〜降りてらっしゅ〜い！朝あさはん出来てるわよ〜！」

「今いくよ、母さん」

一階から母さんの声が聞こえると俺はすぐに返事を返し
下に降りた。

「おはよ、母さん」

「慎司〜お・・・は・・・あ〜っつ〜?」

そう言つて母さんは「いそよばかりにぎゅ」と抱きしめて来る。

「母さん・・・いい加減抱きつくの止めない？流石にこの年じゃ恥ずかしいよ・・・／＼／」

「もういいじゃない、スキンシップよ！スキンシップ！」

これは俺の母さんこと野上 紫《のがみ ゆかり》の日課である。朝の挨拶の時と家に帰つて来た時に必ずハグをする、まあ嫌いじゃないんだけどね。

「さあ、時間も時間だし早く朝ご飯食べちゃいなさいね」

「うん、わかった」

そう言つて椅子に座つて食べ始める、うん・・・今日の味噌汁もいい味だ。

「そついえば桃姉は？」

「桃音はもう学校にいったわよ、友達と課題をする約束があるんですって」

「ふうん、そつか・・・」

桃姉。本名は野上 桃音《のがみ ももね》俺の姉さんだ。凄く優しくて勉強も運動もなんでもござれの完璧超人、俺とはまったく対象外・・・

「慎司・・・」

そんな事を思っていると母さんが心配そうな顔をして俺に話しかけてくる。

「辛い事とか苦しい事があつたら絶対に言いなさい、必ずあなたの力になるから・・・」

「うん・・・ありがとう」

いかんいかん、高校デビューだというのに暗い雰囲気になつてしまった。母さんにお礼を言つと残りのおかずをかつこみ鞆を持って立ち上がる。

「じゃあ母さん、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

玄関前で他愛のない会話をしてドアを開け学校へと向かった。

自己紹介が遅れたけど俺の名前は野上 慎司《のがみ しんじ》今年から私立桜ヶ丘高校に

入学した、なんで地元の高校じゃなく隣町の桜ヶ丘高校を受験したかというところ……早い話地元だと中学時代の連中がいるからである。

実は俺は中学時代にイジメを受けていた、最初の頃はなんともなかったけどだんだんエスカレートしてきて中二の前半は不登校だった。中三の後半からまた学校に行きはしたけどイジメが無くなることはなく……

「なんでお前が来てるんだよクズ！」

「なんだよお前？まだ死んでなかったのかよ？ギャハハハ！」

こんな始末である。ちなみに先生に相談しても何にもしてくれないし止めもしない、何やってるんだろうね？

そんなこんなで受験シーズンが来て悩んでいたところ母さんが教えてくれたのが桜ヶ丘高校。隣町なので地元の連中が来ることもあまりない、

ぶっちゃけ地元から離れられればどこでも良かったので無我夢中でその

高校を受験した。だけどそれがのちにとんでもないことになるうちは……

「さてと、早く電車に乗らないとな」

駅につき電車に乗るためホームに急いでいると・・・

「キヤッ!?!」

「おわっ!?!」

誰かとぶつかってしまった、そのせいで荷物の中身がばらけてしま
う。

「ごめん!俺の不注意で・・・」

「いいんですよ、私も前を見ていませんでしたから」

そう言うと女の子なりにっこりとほほ笑みそう言ってくれた。
ていつかこの子・・・かわええ・・・

ハッ・・・!俺は何を・・・

「では私はこれで・・・」

「あっ……うん、ごめんね」

最後に返事を返した後、その女の子と別れた。

「……名前、聞いておくべきだったかな……」

まあ今の俺にそんな勇気ないが。

「って！？俺も電車乗らないとまずいじゃん!?!」

電車はもう駅のホームまで来てる！走らないと間に合わない！ま・
ず・い

「うおおおおおお！間に合ええええええ!!!!」

俺は全力疾走でホームまで走って行った。 皆は駆け込み乗車はや
めようね

「はっっ……着いたぜ……」

そして着きました！桜ヶ丘高校！やれやれだ・・・

「まずは自分のクラスはどこか確認を・・・なんだあれ？」

クラス表の確認をしようと歩いていたら、一人の人影を目撃する。

なんかうずくまっているように見えるけど・・・

「話しかけなくても・・・いいよな・・・」

人に話しかける勇気がないと言っておこう、イジメの事もあって人話するのが少し苦手になってしまったからだ。

けどもし体調不良だったりしたら・・・あゝっもう！きりがいなな！

「あの・・・どうかしたの？」

俺は意を決して話しかけることにした。小さいころから困っている人が

ほっとけなくてよくお人よしって言われてたっけ・・・

「んっ？君は誰？」

その人は女の子だった、声からして体調不良とかじゃなさそうだけど・・・

「いやさ、なんかうずくまってるようなきがしたから気になって・
・
ところでさ、そんなところで何してるの？」

「えっとね、テントウムシをみていたの！」

「へっ？テントウムシ？」

「うん！すっごく可愛いよね〜！」

なんか変わった子だなというのが第一印象、今時こんな子がいるのかと

正直驚いた。

「あっ！そうだ、自己紹介！私の名前は平沢 唯《ひらさわ ゆい》
《よろしくね！》」

「えっ……ああ……よろしく」

なんか結構マイペースな子だな……この子のペースに全然ついていけない……

「ねえねえ！君の名前も教えて！」

「えっ！？俺！？なんで！？」

「だってせつかく知り合いになれたんだし、何より今日から私達同じ学校の」

仲間でしょ！」

「仲間……」

久しく忘れていた言葉……もう言われる事はないと思っていたのに……
目の前にいる女の子はなんのためらいもなく言葉を返してくれた。

「あれ？どうかしたの？ハッ！？私まさか変な事言った！？」

「あっ！いや、そうじゃないよ！」

なんだかうれいいな……なんて心の中で思っていたり……

「えっと自己紹介がまだだったよな、俺の名前は野上 慎司だ、よろしくな」

「野上 慎司君か、うーんそれじゃ……あっ！しん君だね！」

「えっ！？なぜにしん君！？」

「えーっとね、しん君だからだよ！」

「いや余計意味が解らないよ！？平沢さん！？」

平沢さんは初対面の人にあだ名を付けて話す子なのか！？？だとしたら結構

変わった性格だな・・・そんな事を思っていると

「しん君、私の事は唯で良いよ」

この子は何を言ってやがりますかああああああ！？

「なんで初対面の俺に呼び捨てで呼ばせる！？？て言うかもっと自分を大切に

しなさい！」

「オーバーだよしん君」

「しかしだな・・・はあ・・・分かったよ、ゆっ・・・唯」

結局は唯の言葉におれちまった・・・（・・）

「唯、何処なの〜！」

「んっ？誰だ？」

「あっ和ちゃんだ、こっちだよ〜！」

「唯、やっと見つけたわ、一人で勝手にふらふらしないの！」

「えへへ〜ごめ〜ん」

「もう・・・あら？この人は？」

「さっき友達になったしん君だよ！」

「しん君・・・？」

「ああ、俺の名前は野上 慎司、よろしく」

「なるほど、だからしん君なのね・・・ごめんなさい、唯には悪気はないの」

「いいよ、別に嫌じゃないし」

「そう言ってくれると助かるわ、私の名前は真鍋 和《まなべ》のどか《よろしくね》」

「うん、よろしく」

そう挨拶を交わしていたら唯が

「ほら、早くクラス表見に行こうよ」

「ってこら！唯！待ちなさい！」

「早っ！？てかもうそんなところまで！？？」

もうクラス表が張り出されている場所まで移動していた・・・
どんだけマイペースなんだよ・・・

場所は変わって教室、運良く唯や真鍋さんと一緒のクラスになることが

出来た。

それは良かったが・・・なんだろう、何だか凄く違和感がある・・・

「はいつたばかりでまだ緊張してるんじゃない？」

「そんなもんかな・・・」

「しん君、リラックスリラックス」

二人の優しさが身に染みるぜ・・・そんな事を考えている時に校内放送が流れた

「えゝ新入生の野上慎司君、新入生の野上慎司君、至急職員室まで来て下さい」

へっ！？俺！？

「なんで野上君が？」

「しん君何かしたの？」

「そんな訳ないだろ・・・でも何か分からないからちょっと行って来る」

「「いつてらっしやい」「」

二人に見送られ俺は教室を後にした。

（職員室）

「失礼します・・・」

「おお、来たか」

そう言って出迎えてくれたのは長年教師をしてきたような男の先生、他にも

校長先生や教頭先生らしき人もいる。

「あの、先生・・・俺何か問題を起こしたんでしょうか・・・」

オズオズと先生に聞いてみる。

「いや、君が問題を起こしたという訳では無い」

ホッ・・・良かった、でも待てよ？それじゃなんで俺は呼び出しされたんだ？

「実は・・・今回の入学生についてだが・・・大変言いにく事なんだが・・・」

「はい・・・」

「・・・実は」

「？」

「男子は君一人だけなんだ」

「・・・は？」

「もう一度言おう、男子は君一人だけなんだ」

「うそぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお

おおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

俺の絶叫が職員室中に木霊する、えっ！？今先生なんて言った！？
男子生徒が

なんじゃそりゃああああああああああああああああああああ
ああああああああ

ああああああああああああああああああ!!???」

・
・
勢い余って叫んでしまった・・・俺の高校生活は前途多難の様です・

L I V E 1 高校入学！だがしかし・・・（後書き）

なぜ唯達が主人公を見て驚かなかったのか、その理由は唯達の学校にはちゃんと届いていたからです、こんな感じで進めていきます。
では！

L I V E 2 まさかの一人・・・でも友達は優しいね(前書き)

・ 二話目です、まだ軽音部には入りません。キャラは出てきますが・・・

L I V E 2 まさかの一人・・・でも友達は優しいね

「絶望が・・・俺の・・・ゴールだ・・・」

机に突っ伏したまま俺は訳の分からんことを呟いていた・・・
だってそうだろ！？高校に来て先生に呼び出されたと思ったたら
この学校の男子生徒は俺一人って言われたんだぞ！！どこの
インフィ○ットストラトスだよ！！

「しん君元気だしなよ」

「他人行儀の様な言い方になるけど運が悪かったとしか・・・」

そう言っただけと真鍋さんは俺に声をかけて慰めてくれる、俺が
教室に戻って来た時「一体何事！？」の様な感じの顔で入って
来たらしい・・・

「で、でもさ、退学とかそんな悪い事じゃないんだし」

「何でも悪い方向に考えない方がいいわよ、余計気が滅入っちゃう
し」

「うん・・・そうする・・・」

確かにそうだ、こんなところでうじうじ言ってたって何か変わる訳でもない。せっかく友達と呼べる人が出来たのにこのまま別の学校に行くのも嫌だしな・・・

「ほら、そろそろ教室出ないと入学式に遅れちゃうわよ」

「あつ本当だ、しん君行こう！」

「おう、分かった」

そして俺達三人は教室を後にする、その間にも二人には「大丈夫だよ！」とか「しっかりしなさい」とか色々と元気づけてくれた中学時代の時とは大違いだなあ・・・なんて考えてるうちに体育館に到着した・・・までは良かったが目の中の光景に胃ドツと重くなった。

「見渡す限り女子・・・女子・・・女子・・・」

そう完璧に、完全に（俺を除いて）女子生徒オンリーだった・・・何かちらちらとこっち見てるし！ヤメテ！？俺のライフがゼロになっちゃおう！？

「ではこれより入学式を始めます、初めに校長先生より入学のお祝いのお言葉を頂きます・・・」

そんな感じで入学式が始まった。

「ヴぁ〜しんどかった・・・」

「何か・・・お疲れ様」

「しん君大丈夫？」

「これが大丈夫に見えると思う？」

「「いや、まったく」」

綺麗なユニゾンデスネこんちくしょう!!

あの後どうだったかって？女子の視線が気になって気になって落ち着いていられなかったわ！校長先生は「余り気にせず普通に接してあげてほしい」てな事言っただけとそれ無理だろ絶対に！！

「もう言っただでしょ、考えても気が滅入るだけだつて」

「そりゃそうだけどもさ」

考えちまうんです、はい……

「でも……」

「うん？」

「唯？」

「私達、これでもう高校生なんだね！！ちょっとドキドキしちゃうよー！！」

そう言っただけで唯が俺達二人に屈託の無い笑顔を向けてきた、その顔に思わずドキッとす。

「唯は少しお気楽過ぎ……」

「えゝそんな事ないよ?」

「・・・くくっ」

「?」

「しん君・・・?」

「くくくっ・・・ごめん・・・そんなつもりじゃ・・・

くくっ・・・はははっ!」

二人の会話を聞いてたら不思議と笑いが込み上げてくる、何てことない

普通の会話なのに俺の心はとても不思議な気持ちに満ちていた。

「野上君・・・ここ笑うところないわよ・・・」

「ひどいよゝしん君」

「だからごめんて・・・はははっ」

いままでなかったこんな気持ち・・・さっきまで考えてたことが急に馬鹿らしく思えてきた。

「もう・・・まあそれじゃあ入学式も終わったことだし後は

帰るだけね」

「そうだね、あっ！しん君はどの辺りに住んでるの？」

「俺は隣町から電車で来たんだ」

「えっ！？そうなの？てつきりこの近くに住んでいるものかと・・・」

「唯・・・別のところから来ている人はほかにもいるわよ・・・」

「あ・・・そうだった」

「まったく・・・でも野上君、なんでわざわざ隣町の此処に来たの？
地元にも高校はあると思うけど」

「えっ！？それは・・・」

「言いたくない・・・あの事はもう思い出したくない・・・そんな事を
思っている・・・」

「の・・・野上君！？」

「しん君どうしたの！？顔が真っ青だよ！？」

「・・・はっ！？」

気づいたら俺は顔面蒼白で大量の冷や汗を流していた。

「ご……ごめん、大丈夫……後なんでこの高校を選んだのかって理由はあまり話したくないんだ……」

「私の方こそごめんなさい……あまり聞いちゃいけない話だったみた
いな」

そう言うと真鍋さんは俺に謝った、何か俺のせいで暗い雰囲気にしちやっただな……
そんな事を思っていたら

「じゃあもう暗い話はなしにして……一緒に帰ろう！」

「唯……」

唯がまたあの笑顔で話しかけてくれた、心なしか俺の気持ちも落ち着いているそんな感じがした。

「……そうね、それじゃかえりましょうか」

「うん！しん君も途中まで一緒に帰ろう！」

「いいの・・・？」

「当たり前だよ！もう私達友達だもん！ねっ和ちゃん！」

「ふふっ・・・そうね」

友達だと当たり前のように言ってくれる・・・いままでそんな事なかったのにその言葉
一つ一つがとてもしれしく思えた・・・

「野上君ゝなにぼゝっとしてるのゝ」

「置いて行っっちゃうよゝ」

「えっ！？ちょっと待ってよ二人とも！？」

考えているうちに二人は先先と歩いていき、
って言うか早すぎだろ
オイ！？

その後は三人で他愛のない会話を楽しんだ。

「漣~~~~一緒に帰ろうぜ~~~~！」

私の名前は田井中^{たいなかりつ} 律今年この桜ヶ丘高校に入学した一年生！

「律、分かったからそんな大声で呼ぶのはやめてくれ・・・恥ずかしいだろ・・・」

こいつの名前は秋山^{あきやま} 漣^{みお}私の幼馴染だ

「わりいわりい、まあいいじゃん」

「まったく律は・・・」

「そんな事より漣は見たか？」

「見たって何を？」

「決まってるだろ！この学校唯一の男子生徒の事！」

そう、初め入学式で聞いたときは驚いた。まさか女子高に男子生徒が入学してくるとは
思わなかったからな

「今年から共学になったたたって事ちゃんと中学校に伝わってなかったみたいじゃないか」

「そいつも不運だよな〜周りはみんなじよしだらけだぜ?」

こればかりは同情するよな・・・

「だけどさ遷?」

「ん?何?」

「もしそいつに話しかけられたらどうするよ?」

くくくつ・・・遷は恥ずかしがり屋だからな〜この言葉だけでどんな反応をするか
楽しみだぜ・・・

「えっ!?!いや・・・どうすると言われても・・・私男の人と話すの苦手だし

ただでさえ・・・ぶつぶつ

「もしかしたらナンパとかされたりして〜くくつ・・・」

「ナッ!?!ナン・・・!?!?」

「そうそう！」「君の様な恥ずかしがり屋もまたっ！いい！！」とかさっって

へぶっ！？」

「私をからかうな！ったく！」

漣に拳骨で頭を殴られました・・・痛い・・・

「くだらないことしてないでとっくと帰るぞ」

「えっ！？待ってよ〜漣〜」

私がうずくまっている間に漣はそそくさと先に行ってしまう、あ〜もう！

薄情者〜！

「薄情者で結構」

「心を読むな！」

そんなこんなで会話をする私と漣、でもまあ見たことない男子の事考えたって

しょうがないよな。いずれどっかで会うんだろっしな・・・

そんな事を考えながら私は、遷の後を追いかけて行った。

だがこの二人はいずれ思いもよらない形でこの男子生徒に会うという事は

まだ想像もしていなかった・・・

LIVE 2 まさかの一人・・・でも友達は優しいね（後書き）

いかがでしたでしょうか？律と漣はだしましたがまだムギが出ていません・・・

（LIVE 1の冒頭に台詞だけは出してると・・・）次は必ず出しますので楽しみにしてください。

さて主人公は軽音部のみんななどどんなつながりを持つのか！こころ期待！

L I V E 3 軽音部に入部！（前書き）

S I Nです、今年ももうすぐで終わりですね。ですがけいおん！あ
ったかい日常は

これからも続きます！あたたかく見守っていて下さい。
今回かなり長いかもしれません・・・

LIVE 3 軽音部に入部!

入学式も終わり二週間ほどたった頃ある日の廊下にて・・・

「漣~~~~っ!~!」

「律?」

廊下で漣の後ろ姿を見た私は声を上げて呼び止めた。

「クラブ見学に行こうぜ!」

「クラブ見学?何でまた急に・・・」

「何でって軽音部に入部するために決まってるだろ!
軽音部!」

中学の頃から練習していたドラムがここでやっと出来るんだ!
思うだけでもわくわくするぜ!!

「でも私文芸部に入るつもりだし・・・」

は?・・・漣ハイマナント?・・・文芸部に入るっていったか?・・・

「入部届も書いたし」

「…………ふんっ！」

ビリーーーーーッ！！

「あーーーーっ！？何すんだよ律ーーーーっ！！」

漣の入部届を見た私はそれを思いっきり破いた、フッフ……そう簡単に

にがしやしないよ漣……

「ほら行くぞ、早く早く」

「待て！律！」

怒る漣をよそに私は職員室へと向かった、さあ！輝かしい軽音ライ
フが

私を待ってるぜ！

～職員室～

意気揚々と職員室に来て軽音部の活動場所を聞いたまでは良かった
んだけど……

「・・・・・・・・へ？廃部した？」

先生から聞いた衝撃の言葉・・・・・・・・え？廃部とはどう言うことなんだ？

「正確には廃部寸前ね、昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって
今月中に5人入部しないと廃部になっちゃうの」

がーーーーん！？そんな・・・・・・・・これじゃ私の輝かしい軽音ライフ
が台無し・・・・・・・・

何かの冗談だと言ってくれ~~~~~！！

あれ？待てよ？廃部寸前で事はもし私が今入部したら・・・

「先生」

生徒が先生を呼ぶ声が聞こえた。

「ごめんね、呼んでるから、がんばって！」

そう言うと先生はその生徒のところへ向かった。

「・・・・・・・・」

「きれいな先生だったな」

「・・・・・・・・」

「でも廃部なら仕方ないな、私は文芸部に・・・」

むんず！！

「り・・・律？」

「誰もいないってことは今入部すれば私が部長・・・ふふ・・・
悪くないわね」

そう！そうだ！！今入部すれば私部長じゃん！一番偉いって事じゃ
ん！
いよっしゃああああああ！！

「あの・・・見学したいんですけど・・・」

そんなこと考えているうちに一人の生徒が入ってきた！よし！ここは
勧誘だ！！絶対部員をゲットする！！

「軽音部の！？」

「いえ、合唱部の・・・」

「軽音部に入りませんか？今部員が少なくても「こら！！」「グエツ！
？」

・
そう言うと遷が私の首根っこを掴んで引っ張ってきた、ヤメテ遷・・・
それグルジイ・・・

「そんな強引な勧誘したら迷惑だろ！！」

ゲホッ・・・少しは私の心配してよ・・・

「おまえはそれくらい平気だろ、それじゃ私も行くから・・・」

「漣!?!」

私は漣を呼び止める。

「あの時の約束は嘘だったのか!? 私がドラム! 漣がベースですつとバンド組もうって!?!」

「律・・・」

「それで・・・それでプロになったらギヤラは7:3ねって」ゴン
!?!」「へブツ!?!」

「捏造するな!?!」

いつつ・・・だからって人の頭殴るかふつう(泣)

「ぶっ・・・くすくす・・・」

笑い声が聞こえてきた、笑い声のする方を見ると・・・さつき
勧誘した子
が笑っていた。

「なんだか楽しそうですね・・・キーボードくらいしかできません
けど

私でよければ入部させて下さい!」

えっ!? 本当に!?! やった

!! 部員が一人増えたぞ!!

「ありがとう　　っ！！これで後二人入部すればっ！！」

「・・・私ももう人数に入ってるのね・・・」

あと二人だけだ！！絶対見つけてみせるからな！！やるぜ
！！！！

話は変わってここは一年生の教室。

「「……………うん……………」

「…………唯、野上君 どうしたのよそんなにうなって」

「あ、和ちゃん実はね……………」

「俺達二人してまだ部活が決まってないんだよ……………」

「え！？まだ決まってなかったの？もう入部届の提出期限とつくに過ぎてるわよ！？？」

そう、俺と唯はどの部活に入るかまだ決めていない。俺の場合はどの部活も

女子ばっかだから入りにくいって言うこともあるけど……………はあ……………もう

いっそのこと帰宅部でもいいかな……………」

「でもでも私運動音痴だし文化系もよくわからないし……………」

唯ももっともらしいな……………」

「はあ……………こうやってニートが出来上がっていくのね……………」

「部活やってないだけでニート！？？」

えっ！？世間じゃそんな感じに見えるの？やだよ！？俺ニートなんか

なりたくねーよおおおおおおお！？

「うっうっ……がんばるよ……」

「俺も……」

「まあ決めるんなら早くした方がいいわよ、それじゃ私行くから」

「あれ？和ちゃん、一緒に帰らないの？」

「これから打ち合わせがあるのよ、私生徒会に入ってるから」

「そっか、じゃあ和ちゃんバイバイ」

「じゃあね唯、野上君も」

「ああ、うんそれじゃ」

そう言っただけで俺と唯は真鍋さんと別れた。

「……俺達も帰るか……」

「そっだね」

俺と唯はそう言っただけで帰り支度をした、その帰り道部活の事について話していた。

「しん君は何に入るつもりなの？」

「これと言って入りたいところもないしな……どうしようっ？」

「私もないな」

「とりあえず明日決めよう、二トだけはやだ・・・」

「・・・そうだね・・・」

そんな会話をしながら俺達は帰り道を歩いて行った・・・本当にどうしようかな・・・
部活・・・

〳次の日の昼休み〳

「とりあえず軽音部ってところに入部してみましたっ!!」

真鍋さんと唯と一緒に昼を食べていると唯がそんなことを言っていた、もう部活

決めたのか・・・あれ？軽音って確か・・・

「へ・・・で、軽音部ってどんな事するの?」

「さあ?」

おい・・・今聞き違いじゃなかったら」「さあ?」「って言ってなかったか?

「え・・・」

「でも軽い音楽って書くからきつと簡単な事しかやらないよ!口笛とか!」

「なにそのやる気のないクラブ」

口笛だけで成り立つ部活動なんて聞いたことねえよ!つかそんな部活があるんなら

俺だって見てみたいわ!!

そもそも軽音はそんなじゃない!!

「唯、期待しているところ悪いが・・・」

「?・・・」

「軽音部はそんなところじゃないぞ・・・少なくとも楽器はやるぞ・・・ギターとか」

「・・・はい?」

「いやだからギターとかそう言うもんでバンド組んで演奏したりする部活だぞ、軽音部・・・」

「……………うそおおおおおおお
おおおお

おおおおおおおおおおお！？」

うお！？耳にキーンツてくる！唯声大きすぎだろ！？

「わっわわ私ギターなんて弾けないよお……………」

「じゃあ何なら弾けるの？」

真鍋さんが聞くと

「カ……カスタネット？」

「……………合うな（わね）」

唯がカスタネットをたたいてる姿を想像した……………うん……………何だ
か知らんが
もの凄くしっくりくるのはなぜ？

「うう……………とりあえず今日の放課後辞めますって軽音部の人に
断ってくるよ……………」

「そうしなさい……………」

「うんうん……………」

余り慣れてないところより自分に合ったところの方が一番いいもん
な・・・
まあ唯にはもつといい部活が見つかるさ・・・そう思いながら俺は
昼飯を
食べるのを再開した。

そして放課後・・・

「しん君・・・」

「あれ？唯、どうしたの？」

俺が帰り支度をしていると唯に呼び止められた、なんだか不安そう
な顔を
している。

「軽音部に断りに行くのに・・・ついてきてもらえないかな・・・」
「へっ？なんで？」

「実は……」

く唯 回想く

(もし、私が辞めますって言ったらどうなるのかな？……)

「ああん！？辞めたいだお！？」

「ただで辞められるとおもってんのかkill!!!!!!?????」

(ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイ！?)

く唯 回想終了く

「こんな事思っちゃって……なんだか怖くなって……」

唯の回想明らかにおかしいよね！？なんでだよ！？今の時代こんな
風に

叫んで脅すような人いないよ！？て言うかこの子どもだけ感受性豊か
なんだよ！？

「だからしん君・・・お願い!!一緒に来て!!」

「ええ〜・・・何で俺が・・・」

「そんな事言わないでよ〜」

うう・・・今にも泣きそうな雰囲気だぞこれ・・・はあ・・・もうしょうがないな

俺もまだ部活決めてないし、見学も兼ねてついていくのもいいかな・
・

「分かった、分かったからそんな泣きそうな顔するなって」

「ホント!?わ〜い!しん君!ありがとう!」

そう言いながら唯は俺の手を持ってブンブンと振ってきた、そんなに嬉しいもんかねえ・・・

「ほら、そうと決まったら早く行くぞ」

「わっ!?!しん君待ってよ〜」

かくして俺達は軽音部の部室へと向かった。

（音楽室）

「ここだな、ほら唯、行ってきなよ」

「うう……しん君ここにいてよ!?絶対だよ!?!」

「大丈夫だから……」

唯に念押しされながら俺は頷いた、そんなに言わなくても心配いら
ないのに……
そんな事を思っていると

ガチャ

「ヒイ!?!」

ドアが開く音がした、つか唯……驚きすぎ……

「うちの部の前でなにやってるの?」

ドアから出てきた子はショートヘアで黄色いカチューシャをした女の子だった。

「あ、もしかしてあなた入部希望の平沢唯さんじゃない？」
どうやら部活関係者みたいだ。

「ギターが凄くうまいんだよね！？来てくれるの待ってたよー！！」

(なんかあらぬ尾ひれがついてる(ぞ)！？)()

「あれ？そっちの人は・・・あ
！？この学校唯一の男子生徒！！」

「あんたも入ってくれるの！？」

え！？この人なんか勘違いしてる・・・

「やった
！！これで部員が揃った！さっそくみんなに知らせないと！！」

「いや・・・あの・・・」

「ちょっと待って・・・」

「みんな

！！入部希望者が来たぞ

！！」

反場強引に引っ張られていく俺達、て言うかこの子力つよ！？

「本当か！」

「まあ！」

中に入ると（強引にだが）部員と思われる子が二人いた、一人は黒髪
のロングヘアで

釣り目のちよつと気の強そうな女の子。

もう一人は金髪ロングヘアの太眉でおっとりな感じの女の子だった、あれ？だけど

この金髪の子どこかで・・・

「あつ！思い出した！君あの時駅のホームで・・・」

そつだ！あの時ぶつかった女の子だ！

「あ・・・あの時の」

「ムギ、知り合い？」

「ええ、入学式の時駅のホームでぶつかってしまっ……あの時はごめんなさい」

「あ……いや……俺の方こそ」

思わぬ再会だった、まさかこんなところでまた会うなんて……世間は意外に狭いもんなんだな……

「まあともかく軽音部へようこそ！」

「歓迎しますわ〜」

「よしっ！ムギ！お茶の準備だ！！」

「はいっ」

これはますます言いづらくなってきた……どうしよう……

「どござ〜」

ムギと言う女の子が紅茶の入ったティーカップとケーキを渡してきた、甘い香りが心地よく鼻腔を刺激する。

「「いただきます……」」

俺は紅茶を一口飲んだ、っ！？うまい！？ティーパックの紅茶とは

比べ物にならないくらいだ！

ケーキも一口かじる、こっちも甘すぎずしつこくもない濃厚な生クリームが舌の上で溶けた。

生地もしつとりしていて凄く軽い・・・

「おいし〜」

「ふふっありがとう、これは琴吹家自慢の紅茶よ、まだたくさんあるから」

「いっぱいおかわりしてね」

唯も同じ事を思ったみたいだ、なんだか幸せな気分になるよ・・・

「・・・実は私達も今年の新人部員なんだけど・・・」

ショートヘアの子が語り始める

「先輩達がみんな卒業しちゃって今部員が私達3人だけなんだ」

「部員が5人いないとクラブとして認められなくて、一週間以内にあと二人

集まらなかつたら廃部になるところだったんです」

「本当に入部してくれてありがとう!」

ますます言いつらい！

(唯……そろそろ本当の事言わないと……)

(う……うん……)

そう俺達がここに来た理由は入部を断ることだ！早く誤解を解かないと！

「そういえば平沢さんって……野上君……だっけ……二人はどんな

ミュージシャンが好きなの？」

黒いロングヘアーの子が質問してくる。

「「じ……じじじ」」

「ジミー・ペイジ!？」

「「い……いや、じ……じじ」」

「ジェフベックか!？いや、二人ともいい趣味してるな、実は私も・

……」

「そうじゃなくて!?!」

もうきりが無いと思い俺は声を上げた黒髪の子がビクッと肩を震わせた。

「俺は入部希望に来たんじゃなくて唯の付添に来たんだ、唯もここに来たのは

入部を断りに来たからだよ」

「えっ・・・そうなの？」

「ごめんなさい・・・もつと別の楽器をやるもんだと思って・・・」

「え？じゃあ何なら出来るの？」

「カスタネ・・・ハーモニカ！」

見え張ったな・・・唯・・・

「あ、ハーモニカならあるよ！吹いて見ろ」「ごめんなさい吹けません！」

なんでハーモニカ持つてんの！？

「ほかにやりたい部活とかあるの？」

「う・・・ううん特には、それじゃ私たちがこれで・・・」

「そうだね、そろそろおいとましようか」

「えっ！？もう行くの！？えええとほらまだ話したん無い事とかあるし・・・」

「え……でも……」

「お茶のおかわりもまだあるわよ!？」

「いや……その……」

「それにまだどんなミュージシャンが好きか語り合えてないしな!？」

「うわ……どうしよう……この三人俺達を引き留めるのに必死だよ……」

「ここはどうする?逃げるか……?などと考えていると……」

「……グスツ……」

「「「「!?!?!?!?!?」」」」

唯が泣き出してしまった……

「グスツ……ごめんね……私がいい加減な気持ちで入部届出したから……ヒック……」

「みんなに迷惑かけたくなって……」

「唯……」

唯は責任感が強い子なんだな・・・怖いって思いだけじゃなくそんなことまで考えてた
なんてな・・・

「ほら唯、大丈夫だからさ、これで顔吹きなよ」

俺はポケットからハンカチを取り出し唯に渡す。

「グスツ・・・ありがと・・・しん君・・・」

「わ・・・私たちもごめんな・・・」

「なんだか悪いことしちゃって・・・」

「ごめん・・・」

・・・だめだ・・・この暗い雰囲気、なんかぱっとみんなが明るくなるような

話題とか何かないか・・・！？そつだ！！

「あ・・・あのさ・・・」

「」「」「???」「」

俺はおずおずと聞いてみる

「三人とも楽器出来るんだよね？どんな感じかなって聴いてみたいんだけど」

「どうかな？」

「そ．．．そうだな、じゃ．．．じゃあさ、私達の演奏を聴いてから入部」

「するかしないか判断するのはどう？」

「え？演奏してくれるの！？」

「うん！もちろん！いいよな、ムギ！漣」

「ああ！（えええ！）」

そう言うと三人はそれぞれの位置につき演奏の準備を始める、それぞれ準備が整い演奏を始める。

曲は「翼をください」だ、演奏は．．．ぶっちゃけ漣くうまいとは言い難いが、

なんだか聴いてるこっちがあつたかくなるような．．．そんな感じがした．．．

演奏が終わると俺と唯は三人の下へ駆け寄った。

「えへへ．．．どうだった？」

「なんて言うか．．．漣く言葉にしにくいんだけど．．．」

「あんまりうまくないですねー！！」

（（（バツサリだ

！！！！）））

いや！？もうちょっと言い方があるだろ！？个性的だとか！
面白いですとかさあ！？

「でもなんだか、楽しそうな雰囲気伝わってきました・・・私この部に

入部します！！」

「ホントに！？やったあああああ！！」

「これから一緒に頑張ろう！！」

「よろしくね」

唯・・・良かったな・・・

「それと・・・野上だっけ？お前はどっすんの？」

「え！？俺！？」

「せっかくだし野上君も入ったらどうかね」

「しん君も入ろう？まだ部活決まってないんでしょ？」

「そりゃ・・・まあ・・・」

俺が入っていいのかな・・・そんな考えが頭をよぎる・・・
怖いと思う反面この輪の中に入りたいと考えてる自分がいた

「まあ溲の事は気にすんなよ！溲は男子が苦手なだけで野上の事
嫌いなわけじよ」ゴンツ！！」「げふう！？」

「律はまた余計な事を・・・ハツ！？いや野上律の事は気にしな
いでくれ

私は歓迎するぞ！」

「・・・クククツ・・・ハハハツ！！」

「「？？」」

「なんか・・・クククツ・・・面白いな二人とも・・・俺がさっき
まで

考えてたことが馬鹿らしくなってきたよ」

「何考えてたんだよ」まさかエロい事とかか！？」

「なんでじゃいー！」

「ふふふ・・・」

「しん君おもしろい」

もう迷うのはやめた！俺はこの部にいたい・・・そんな気持ちでいっぱいだった。

「みんなが・・・」

俺は意を決して話す。

「みんなが良ければ・・・迷惑じゃなかったら・・・俺も軽音部に入っていいかな・・・」

「迷惑なわけないだろ！大歓迎だ！」

「ああ！」

「ええ！」

「そうだよ！しん君！」

帰って来たのは俺が欲していた言葉・・・この学校に入る前までは決して

言われることのなかった言葉・・・俺はたまらなく嬉しかった。

「と言う訳でさっそく自己紹介と行こう！！まずは部長の私！田井中律！」

「私の名前は秋山遼、よろしく！」

「ことばき琴吹紬むぎといます、よろしくね」

「平沢唯だよ！呼ぶ時は唯って呼んでね！」

「野上慎司です、この学校唯一の男子生徒です！よろしく！」

こうしてみんな自己紹介が終わり俺は軽音部に入部した。

「そうだ！せっかくだから入部と同時にギターを始めてみたらどうかしら？」

「あ、それいいんじゃない？」

「この部ギターいないしね」

「この際だからしんくんもギター始めてみたら？」

「ギターが二人もいたら曲の幅も広がるしな！」

「ギターか・・・でも何か難しそうなイメージがあるんだよな・・・」

「大丈夫だよ、私たちも分かるところは教えてあげるし」

「そうだねっ！さっきの演奏聴いてたら私にも出来るって感じがしたよ〜！」

いい話が台無しだよ!?

L I V E 3 軽音部に入部！（後書き）

疲れた・・・これで今年の小説はお終いです、みなさんよいお年を。

LIVE 4 ギターを買おう！前編（前書き）

新年明けましておめでとございます！

今年も皆さんにとって良い年でありますように・・・

では、第四話スタート！

LIVE 4 ギターを買おう！前編

「えっ！？結局軽音部に入ったんだ、しかも野上君まで」

次の日のお昼俺と唯は昨日の事を真鍋さんに話した、まあ本当は断るつもりだったんだから驚くのも無理もないか・・・

「うん、どうしても入部してほしいって言われて」

「けっこう切羽詰ってたもんな」

「そうなんだ」

「ギターーから教えてくれるんだって」

「へえ、唯がギターをね・・・あ！と言うことは新しくギター買ったりするんだ」

「ギターって結構な値段するからな・・・まあそこは親に相談するけど」

「え？ギターって5000円くらいで買えるものじゃないの？」

.....
.....

．．．．．
．．．．．
．．．．．
おい．．．

その後、放課後の軽音部の部室

「こんにちは」

「ちわ」

俺と唯は軽く挨拶をすると部室に入っていく、そこでは琴吹さんがお茶を準備して待っていてくれた。

田井中さんと秋山さんにも軽く挨拶を交わすと俺達は琴吹さんが入れてくれた

お茶をすする．．．うん、なごむね．．．

「ねえねえ、みおちゃん」

そう思っていると唯が話を切り出した、ちなみに唯は秋山さんの事を「みおちゃん」
田井中さんの事を「りっちゃん」、琴吹さんの事は「ムギちゃん」と呼んでいる。

「ん？なんだ、唯？」

「何でみおちゃんはギターじゃなくてベースをやるうと思ったの？」

前の自己紹介では触れなかったけど、秋山さんはベース担当、田井中さんは

ドラム、琴吹さんはキーボードの担当だ。

「だってギターは……………は……………はずかしい……………」

「「はずかしい!?!」」

「ひっ!?!」

思わず声を上げてしまい秋山さんがビクツと肩を震わせた、て言うかはずかしいとはどう言うこと？

「ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃいけないし……………」

観客の目も自然と集まるだろ？自分がその立場になるって考えた
だけで……………

……………きゅ……………
「……………」

「みおちゃん！？（秋山さん！？）」

秋山さんは結構繊細なんだな……見た目は「すつごくかつこよく
て綺麗なんだけどな……………」

「ふえ！？／／のののの野上！？いきなり何を！？／／／」

んっ？あれ？……………ハッ！？俺声が出た！？うああ
ああああ

ああああああ！？はずかしい……………／／／

「おい野上！いきなり溼を口説くなよ」

「えっ！？いや！？口説いた訳じゃなくて……………」

「しん君？そうなの？」

「あらあら」

「唯！？そんなんじゃないから！！琴吹さんも！からかつのはよし

てくれ!!」

だあゝ!!もう!!別の話題だ!別の話題!!

「そつそつ言えば琴吹さんはキーボードうまいよな!キーボード歴
長いの?」

「話そらしたね・・・」

そこ!!うっさい!!／／／

「私四歳の頃からピアノを習っていたの、コンクールで賞をもらっ
たことも

あるのよ」

「な・・・何か凄いな・・・(なんで軽音部にいるんだろう・・・)

「そつ言えばずつと疑問に思ってたんだけど」

唯はお茶をすすりながら質問した。

「この部屋ってやけに物がそろってるよね?ティーカップとか、最
近の学校って

こんな感じなのかな?」

それは俺も思った事である、そもそも音楽室にティーカップのセツトが

ある事自体が疑問だが・・・先生の許可はもらっているんだろうか？

「ああ、それは私の家から持って来たのよ」

「「自前!?!」」

うそお!?!これ全部持って来たものお!?!どう考えても高そうな物ばっかだよな!?!

.....
.....
.....考えるのはよそう.....

「りっちゃんはドラム〜って感じだよな」

ゆいゆいゆいゆいゆい!?!お前はもう少し考えるって事しろよおおおおお!?!

マイペースすぎるだろおおおおおおお!?!

「んなつ!?!私にもちゃんと始めた理由あるのよ!?!」

「……おい……」

俺達が軽音部だって事忘れてないか……

「そう言えばギターってどれくらいするの？値段」

「うーん……安いのは一万円代くらいからあるけどあんまり安すぎるのも

よくないから、最低でも三万円くらいのがいいかも……」

「さんまんえん！？私のおこづかい半年分……」

「あゝまあそれ位はするよな」

「高いのは10万円以上するのもあるよ」

「……部費で落ちませんか？」

「落ちません」

まあ、そりゃそうでしょ……

くその日の夜 野上家く

「ふ〜・・・つかれた・・・」

風呂から上がり、リビングのソファに座りテレビを見る。

特に面白い番組もなくチャンネルを変えていると後ろから誰かが抱きついてきた。

てか、この感触はあああああ！？

「んふふ〜？し〜んちゃん？」

「も・・・桃姉・・・」

やっぱり・・・桃姉か・・・そう、この後ろから抱きついてピンクオーラ全開の

この人が俺の姉、野上桃音だ。

容姿端麗、勉強もスポーツも何でもござれの完璧超人……………

・・・のはず

このブラコンと言う性格がなければ・・・

「えへへ〜会いたかったよ〜」

「桃姉！？ちよっ！？抱きつくなよ！？／＼あたってる！！あたってるから!？」

「ん〜？な・に・が？」

ムニユ、ムニユ

うあああああああああああああああ！？やめるおおおおお
おおお

おおおおおおおおお！？りせいが！？りせいがほっかいする
うううう

うううううううううううううう！？

「こゝら桃音、慎司が困ってるでしょ？やめなさい」

「え〜もう・・・しょうがないな」

たっ・・・助かった・・・母さんグッジョブ・・・

「続きはまた後でね？しんちゃん？」

俺に逃げ場は無いのか・・・

「そう言えば慎司、私に話したい事があるって言ってたけど何かしら？」

「あ、その事なんだけど・・・」

俺は母さんに今日の事を話した、今俺の家は父さんが海外出張に行っていて

お金の管理をしているのは母さんなのだ。
そして話を終わると・・・

「うん、そう言う事ならギターのお金出してあげる」

意外にあっさり通してくれた・・・え？本当に!？

「いいの・・・？母さん？」

「慎司が自分で初めてしたって言った事、無下にはできないですよ？」

でも、やるからには最後までやり遂げなさい！

「あ・・・ありがとう・・・母さん・・・」

「うふふ、しんちゃん、よしよし？」

「って!?!どさくさに紛れて頭なでるなあ!! / / / /」

「ちえ〜」

「おつ俺もつ寝るから!!明日軽音部のメンバーと楽器見に行く約束があるから!!」

「おやすみ!! / / / /」

「おやすみ〜」

「 ふう」

「ねえ、お母さん」

「何?桃音」

「しんちゃん桜ヶ丘高校に通い始めてから凄く生き生きしてきたね」

「ふふ . . . そうね」

「私安心したよ、しんちゃんが中学生の時苦しんでいたのに私何にも出来なかったから」

「桃音」

「あつ大丈夫だよお母さん、もう私自分を責める事はしないから」

それに今はしんちゃんが凄く明るくなった事がとっても嬉しいも
ん！」

「……そうね……そうよね」

「今のしんちゃんの友達に感謝だよ……まあ女の子ばかりな
のは

ムツとするけど……」

「もう……桃音ったら……ふふ」

その夜の野上家のリビングでは母と娘の楽しそうな笑い声が聞こえ
てきた。

〳〵次の日の休日〳〵

「……ちよつと早く着きすぎたかな……」

予定の時間より三十分早く着いた、まあ十分前行動は当たり前だし

時間は大切にしないとな。

「あっしんくん、おはよ〜」

などと考えている時に琴吹さんがやってきた、制服とは違い私服は清楚で綺麗な感じがする。

「おはよ、琴吹さん」

「しんくん早いね〜」

「まあ、いつもより早く起きたし自分の楽器を見てもらうのに遅刻はしたくないしな。」

「ふふ・・・まじめだね〜」

そんな笑顔にかなりドキツとしたことは秘密・・・

そんなこんなで色々話をしていると、田井中さんと秋山さんがやってきた。

後は唯が来ればいいんだけど・・・

「唯の奴、遅いな・・・」

「だね・・・」

待ち時間からもう二十分は過ぎている、心配になって携帯を開こうとする……

「ごめん!!遅くなっちゃった〜!」

「唯!遅いぞ!」

「ごめんごめん……すぐそちに行くから〜」

あゝ良かった……これ後は楽器を見に行くだけなんだけど……

「えへへ〜かわいい〜」

あと数メートル……数メートルの所でたどり着かない……遅刻の原因はこれのせいなんじゃないか?

「お待たせしました〜」

「まったくだぞ……唯」

結局着いたのは三十分オーバー、最後までワンちゃんと戯れていました……

「お金は用意出来た？」

「お母さんに無理言っつて5万円前借させてもらった」

「俺も昨日母さんに相談してそれ位貰った」

「お金つていつ必要になるかわかんないよね・・・これからは
計画的に使わなきゃ！」

決意する唯、うんうんそうだよな、お金は限りあるものなんだから
計画的に
使わないとな！

「・・・いけないんだけど・・・この服かわいい・・・今なら買
える！」

・・・
・・・
・・・
決意した傍からこれですか・・・

「おい、唯・・・」

「見るだけ・・・見るだけ・・・」

田井中さんが止めるが結局は服屋の中に入ってウインドウショッピングを始めてしまう、
その後もゲーセンでユーフオ キャッチャーや太○の達人をしたりした、おい……..
お前ら今日の目的忘れてないか……

「あゝ遊んだ遊んだ！」

「てか私達なんか忘れてるような気が……」

「おい律、今日は唯と野上のギターを見に来たんだろ……」

「あっ！忘れてた〜」

当の本人が忘れてどうすんの……

「まったく……ほら、早く行くぞ」

この後真つ直ぐ楽器屋へ向かった。

そして着きました楽器屋！！

「ふわ〜！すごいギターがいっぱい！」

「ほんとだな・・・」

見渡す限りギター、ギター、ギター、もうギターだらけ、こんなに種類があるとは驚きです・・・

「何か選ぶのに基準とかあるのかな？むむむ・・・」

「ギターって音色はもちろん重さやネックの形や太さもいろいろあるんだ」

なるほど、そうなのか・・・秋山さんの話は勉強になるな。

「だから女の子はネックが細くて軽いやつw」あ、このギターかわいい〜」「・・・」

人の話は最後まで聞こうよ、唯・・・

「んっ？おい唯、このギター25万円するぞ」

「えっ！？うそ！？」

俺は値札を見た、唯が選んだギターはレスポールタイプと呼ばれるもの

らしい。

秋山さんが十万以上するのもあるって言ってたけどまさかこんなところで

拝むことになるとは……

「確かに高いな……唯、他にも初心者向けで手ごろなギターもあるぞ？」

「うっ……でも……このギターがいい……」

「なら値切るとか？」

「？……しんくん、値切るって？」

「え？ああ、自分が欲しい物の値段を下げてもらうことだよ」

「私も今持っているドラムも中古店で値切って値切って……」

「店員さん泣いてたぞ……」

どんな値切り方したんだよ・・・

「かつこいい！！私も憧れるわ〜！！」

琴吹さん！？憧れる対象間違えてるよ！？

「気持ちは分からなくもないかな、今私が持つてるベースも欲しくて
たまらなくて・・・必死でお金ためて・・・」

「あっ！それだ！」

秋山さんが自分のベースの話をしている時に田井中さんが閃いたと
言わんばかりに声を張り上げた。

「みんなでさバイトするんだよ、そしてみんなで集めたお金で唯の
ギターを買うんだ！」

「律にしてはいい考えだな」

「うん！なんだか楽しそう！」

「そうだな、やってみようか！」

「・・・いいの？みんな・・・」

唯が不安そうに聞いてきた。

「いいに決まってるだろ！それに早くギターを買ってもらってみんなとセッションしたいしな！」

「りっちゃん・・・うん！私もがんばる！」

「それじゃあバイト作戦決行だ〜！」

田井中さんの号令のもと俺達の唯のギター購入の為にバイト作戦が始まった。

L I V E 4 ギターを買おう！前編（後書き）

次の話はバイトの話になりますね、次の投稿も早めにしたいと思いますではまた。

LIVE 4 ギターを買おう！後編（前書き）

前の話がグダグダに終わったかなと心配している今日この頃・・・

そこは見逃してください！！

では、後編スタート！

LIVE 4 ギターを買おう！後編

唯のギター購入の為、俺達は短期で働けるアルバイトを探すことになった。

アルバイトの事を母さんに話したらこれまたあっさり了承してくれた。むしろ

心配していたのはバイトの時地元の連中に会うかもしれない事と、そいつらに

何かされないかという事だった。

確かにもっともな事だけど、せつかくみんながやる気なのに俺の都合でやめる

何てことは絶対したくなかった。だから心配しなくてもいいよと母さんには話

をした、内心は凄く不安だけど・・・

俺のギターも唯のギターと一緒に購入する事にした、練習もみんなと一緒にしたいしね。

次の日の放課後、俺達は軽音部の部室で田井中さんが持って来た求人広告を広げ
みんなで出来るバイトを探していた。

「うん・・・どんなバイトにするか・・・」

「いっぱいあるわね」

「とにかく、短期間で稼げるところを見つけないとな、早くみんなとセッションしたいしな」

みんなで口々と言いながらどんなところがいいか探した、バイト探しも

楽じゃないなあ・・・

「ここなんかどうだ？ファミレスのバイト！」

田井中さんがそう言いながら求人広告を見せてきた、うん・・・結構高収入だね。

「・・・無理だ・・・」

「?・・・秋山さん？」

秋山さんが静かに声を出した、無理ってどう言う事だ？

「これ接客業だろ・・・目立つ仕事はちょっと・・・中の仕事はともかく・・・」

あゝなるほど・・・秋山さん恥ずかしがり屋だからな、何故か納得・・・

「え〜良いと思ったのにな、ん〜とじゃあこの駅前のティッシュ配りはどうだ？」

「それもちよつと・・・」

「あ〜もう！らちがあかないな！」

「目立つのは苦手なんだよ〜（泣）」

そこまで嫌なんだ・・・ん？これなんかどうだろうか。

「ねえ、こんなんどうかな？」

そして俺が見せたのは交通量調査の広告だった、ただ座って歩いて
いる人が
来たらカウンターを押し交通量を調べると言う内容だった。

「これだったら秋山さんが恥ずかしがる事もないし短期で出来るよ、
どうかな？田井中さん？」

「うん・・・いいと思う、だがしかし！何か引つかかるんだよな〜
野上」

「えっ？田井中さんそれだ」それだよ！その言い方！いつまで他人

そんなこんなで来たるバイトの日がやってきた。

「では、通行者が来たらこのカウンターを押してください、二人一組の

交代制で行います、頑張ってください」

「『は い!!』」

「わかりました」

「よろしくお願いします」

バイトの内容の説明を一通り聞くと俺達は挨拶をして持ち場に着了。

ああ・・・バイトは初めてだから緊張するな・・・

「とりあえずシフトはこんなんで良いよな」

「ん？ちょっと待て田井中さん、このシフトなんか変じゃない？俺の交代時間が無いような・・・」

「ああ、慎司にはぶっ続けでやってもぶっから」

うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお

おおおおおおおおおん!?

「えっ!?!なんでだよ!?!」

「慎司も男だろ〜こんな時ぐらい気前見せるよ〜」

気前も何もないじゃん・・・あんた・・・グスン・・・

「さあ!時間も惜しいし早く始めようぜ!最初は漣と慎司からだからな!」

「おい!律!」

ああもう・・・どうにでもなれ・・・

俺と秋山さんはパイプ椅子に座り、カウンターを持って押し始めた。
・・・なんか癖になるな、これ・・・カチカチッて・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・気まずい・・・・・・・・

何の会話もない・・・黙々とただカウンターを押しているだけで何か暗い・・・

くそっ！？何か武器は無いのか！？
そんな事を考えていると・・・

「な・・・なあ・・・野上・・・」

秋山さんから話しかけてきた、何か珍しいな・・・

「何？秋山さん」

「律の奴がごめん、でもあれでも結構いい奴なんだ、だからあまり悪く

思わないでくれるか・・・・・・・・？」

さっきの事気にしてたんだ・・・秋山さん優しいな・・・

「別に気にしてないよ、それに軽音部に入れてくれた事には感謝してるんだ、

悪く思うことはないよ」

「そうか・・・良かった・・・」

そう言うと秋山さんはホツとしたように胸を撫で下ろした。

「それより俺は秋山さんに嫌われてないか心配で・・・

「えっ！？私が野上を？」

「いやさ、部室にいる時も目を合わせても逸らすし、あんまり会話もしないから俺嫌われてるんじゃないかなと・・・」

「そっ・・・そうじゃないんだ・・・嫌ってるんじゃないかと・・・ええと・・・」

「・・・?」

「私人の目を見て話したりするのが苦手なんだよ・・・ただでさえ目立つことも苦手なのに・・・ハア・・・」

あゝそう言えば秋山さんは恥ずかしがり屋なんだっけ・・・
俺とあまり会話をしなかったのはこれが原因か・・・

「だから決して野上の事嫌ってるんじゃないんだ、でも気にしてたらんなら

謝る・・・ごめん・・・」

「いや！？別にいいよ、謝らなくて！俺が気にしてただけだから！俺も

変な事聞いてごめん！」

「いやでも・・・」

「いいから！」

「・・・」

「・・・」

「くく・・・」

「ふふ・・・」

「「あははっ！」」

何かくすぐったくなって俺と秋山さんは笑っていた、こんな時が凄くうれしい。

「なんだかお互い謝ってばかりだな」

「そうだね」

「なあ、野上……」

「何？秋山さん」

「私がんばってなれるように努力するよ、野上とも一緒に喋ったりしたいしさ」

「秋山さん……」

「だ……だから次からは野上の事……し……慎司って呼んでいいか？／／／私の事は漣でいいからさ／／／」

「えっ！？いや……それは構わないけど……秋山さんはいいの？下の名前で呼んでも」

「じゃあこれが友達になった証でって言うのはどう？」

「……わかった……じゃあ改めてよろしく、み……漣……／／／」

「ああ、よろしく……慎司／／／」

こうして俺と漣は互いに握手をして名前を呼び合った、顔を真っ赤

にして・・・

漣は交代して次は琴吹さんがやってきた、その手には飲み物が二つ用意してある。

「しんくんお疲れ様、飲み物買ってきたんだけどどう？」

「ありがとう、いただくよ」

そう言っておれはレモンティーを受け取った、缶のふたを開けて飲み始める。

乾いた喉にレモンティーの甘酸っぱさが心地よかった。

「あ〜うまい、でも紅茶は琴吹さんが入れてくれたのが一番おいしいかな」

「まあ・・・ふふ、ありがとうしんくん、お世辞でも嬉しいわ」

「お世辞じゃないよ」

これは本当に思った事、軽音部のみんなだって絶対そう言うにきまってる！

これだけは断言できるな。

「でも琴吹さん、いつも紅茶とケーキを持ってきてくれるけどこんなに毎日」

「いいの？うちの人が困ったりしない？」

「ええ、家に置いておいても余らせてしまうだけだから・・・みんなにもらって」

「もらった方が嬉しいわ」

「そっ・・・そうなんだ・・・(どんだけえ〜)」

「しんくんは学校楽しい？」

「え？うん、楽しいよ？どうして？」

「私もすつごく楽しい！りっちゃんやみおちゃんと軽音部に入ってるゆいちゃんと」

「しんくんも入って・・・とっっても！」

「・・・そっか」

「だからね・・・」

「？・・・」

「これを機にしんくんも私の事名前で呼んでくれない!？」

「琴吹さんがずんずんと詰め寄り近づいてくる、いや!?!ちよっ!?!? 顔近!?!?」

「ねっ!しんくん!」

「いや・・・その・・・」

「呼んでみて!紬って!」

「えっと・・・・・・・・・つ・・・紬・・・」

「はい!よくできました」

「にっこりとほほ笑む紬、この子こんなに積極的だったのね・・・人は見かけによらないってこう言う事なんだな・・・」

「じゃあさ紬、この際だからみんなが呼んでるみたいにムギでもいい?その方が呼びやすいし」

「うん!いいよ!よろしくね!しんくん!」

「よろしく、ムギ」

ムギと話しながらカウンターを押していると田井中さんがやってきた、どうやら交代の時間らしい。

「しんくん、それじゃあがんばってね」

「ん、りよーかい」

返事を返した後、俺とムギは一旦別れた。

「ようっ！がんばってんな」

「まあぼちぼちと」

「まあ～そんな暗い感じになんって！がんばればいい事あるぞ」
「！」

おいおい・・・

「とりあえず座ったら？早く数えて今日の分の仕事終わらせよう」

「それもそだな」

田井中さんはそう言ってパイプ椅子に座りカウンターを持って数え

始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・結構退屈だな、これ」

「まあ座って押すだけだしね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日は晴れるかな？」

「全国的に快晴みたいだよ」

「ふ〜ん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ~~~~~」

もう！

静かすぎるー！ー！

「うわっ！？びっくりした!？」

「だめだ……この仕事私には向いてない……このカウンターで
押す

だけの作業、ちまちましていて何かイライラする……」

「しょうがないよ……そう言う仕事だし」

「話すにしても何か面白い話題とかないのか？」

「話題ね……そう言えば漣と田井中さんはいつも一緒にいるけどさ
どんな関係なんだ？」

「ああ、漣と私は幼馴染で……って慎司！今漣の事名前で呼んだ
だろ！」

「え？いや漣が呼んでいいって言ったか」「何で私の事はまだ田井
中さんなんだ！」

「言ってもな……」

「……グスン……慎司は私の事友達と思ってないのか？……」

「そっ！？そんな事！？」

「……じゃあ私の事名前で呼んでくれる……？」

「わかった！わかったから！泣かないで！？たいな……じゃなく
て……」

えと……り……律……」

「……く……く……あはは

「!!」

「……………はい?」

「いや〜泣き落としてほんと効くんだな〜慎司の面白い反応も見
れたし

一石二鳥だな!」

「……………」

「?慎司?」

「俺の罪は二つ……一つは律の嘘泣きに気づけなかった事……
もう一つは

友達だからと思って甘く見ていた事……」

「慎司?お〜い

「律……俺の罪は数え終えたぜ……さあ……今度は律……」

「へ……?」

「お前が……」

「いやさ……悪かったって……慎司……」

「お前の……罪を……」

「ヒッ!?!?」

「・・・ねえ、しん君」

唯が話しかけてきた、どうしたんだろ？

「どうしたの？唯」

「じめんね・・・」

唯がいきなり謝ってきた、ほんとにどうしたんだ？いきなり？

「私があんたのギターが欲しいって言ったからバイトにまで突き合わせちゃって・・・」

何だ・・・そんな事悩んでたのか・・・

「気にしてないからいいよ、それにバイトなんていい経験だし」

「でも・・・」

「ストップ！唯、これ以上言ったら怒るぞ」

「・・・うん、ありがとうしん君・・・」

「・・・お礼を言うのは俺の方だよ」

「えっ？」

「唯が友達になってくれたから真鍋さんと知り合えて・・・遷やムギ、律とも

仲良くなれて・・・だから本当に感謝してる」

「そんな事言われたら照れるよ／＼／＼」

「前じゃこんな事無かったからな・・・」

「？しん君？」

「いや、何でもない・・・早くこのバイト終わらせちゃおう！」

「うん！そうだね！」

俺達は交通調査を再開した、いつか唯達にも俺の過去が話せる時が来るのかな？・・・

～バイト一日目終了～

「あゝ疲れた〜」

「お疲れ様〜」

一日目のバイトが終了した確かバイト期間が四日間て言ったからあと三日間……
がんばろう……

「それじゃみんな、また明日〜」

「じゃあな〜」

「バイバイ〜!」

そう言っつて律と漣と別れた、俺もそろそろ帰るとしますか。

「しん君、ムギちゃん、途中まで一緒に帰ろう?」

「ええ、いいわよ」

「俺もいいよ」

その日の帰りは唯とムギと一緒に帰った、途中いろんなことを話題に談笑しながら楽しんだ。
駅で唯と別れムギと一緒に電車に乗っているいろいろ話した、てかムギも

俺の家の方向一緒だった事忘れてたよ・・・

「次の朝からは一緒に登校しましょう」「と言われた時は驚いたけど断る必要もなかったので快く了承した。

なんかドキドキしたのは気のせいじゃないはず・・・うん・・・

「四日間お疲れ様！もし気が向いたらまた来てね！」

「」「」「」「ありがとうございました！！！！！！」「」「」「」

バイト期間も終わり今日俺達はお給料を頂いた、あゝこれが労働ってやつかゝ働いてる人の苦勞が身に染みるね・・・

「さっそくみんなの給料合わせてみようぜ！」

「とりあえず場所を移動しよう」

そして俺達は駅前のマッ○にやってきた。

「じゃあみんな、出すぞ・・・」

「はいっ！」

みんなは給料袋からお金を出す、一人分の給料は一万五千円程だった。

それを五人分足すと・・・七万五千円、唯の手持ち金五万円を足しても

十二万五千円・・・まだ足りないな・・・

「まだ届かないな・・・」

「そうだね・・・」

「どうしようか」

「またどっかバイト探すか！」

「ねえ・・・みんな」

また次のバイトを探そうかと思ってる時、唯が話しかけてきた。

何だろ？

「やっぱりいいよ、このお給料はみんながみんなの為に使って！」

唯が俺達に給料袋を返していく、でもなんで・・・

「私も軽音部の一員だもん、早く私もギター買ってみんなと練習したいもん」

だから私でも買えるギターを選ぶよ」

「唯・・・」

「だからみおちゃん、またギター選びに付き合ってくれろ？」

「ああ！もちろん！」

「じゃあ今度の休みにまたあの楽器屋さんに行きましょう」

「賛成！」

「そうだね、俺のギターも選ばないといけないし」

みんな満場一致で賛成した、唯の決意を無駄にしないためにも俺も頑張って協力しよう！

「次の日の休日 楽器屋」

「えへへっやっぱりこのギターかわいいっ」

「……………なんでやねん……………」

「決意したのにこれ!? 唯……………一度君の頭の中見てみたいよ……………いや本当に……………」

「おい、唯っ」

「……………でも……………でも……………」

「……………このギターが欲しいのよね?」

「ムギ?」

「ムギちゃん?」

「こっちは丸く収まってるけど向こうで店員さん泣いてるぞ・・・」

「あとは慎司のギターだけだな」

「あ、そうだね、俺も選ばないと」

そう言っつて俺は店内を見渡す、すると綺麗なメタリックブルーのギターが

目に留まった。

・・・うん、色は俺好みだ、値段は・・・三万ぴったりだしちょうどいい感じだな。

「あ、それストラトキャスタータイプだな、初心者でも扱いやすいギターだぞ」

「そっか、じゃあ俺これにするよ」

店員さんに声をかけてギターを購入する、その他にチューニング用の機械と

交換用の弦も購入したら五万近くなった。

母さん・・・余分にお金をくれてありがとう・・・

「よし！慎司もギターを購入したしこれで・・・」

「明日から本格的に軽音部のスタートだな」

「たのしみね」

「じゃあみんな、明日からまたよろしく！」

「よろしくね」

明日からみんなと一緒に練習できる・・・そんな事を思い期待を膨らませながら

俺は帰路についた。

「……………すっごく楽しみだ！家に帰ったら少しコードの練習しよう。」

〱その夜平沢家 唯の部屋〱

「えへへ〜やっぱりかわいい〜」

私は今日買ったギターを見つめてはそうつぶやいた、しん君達は「かわいい?」って

聞いてきたけど私おかしな事言ったかな?

まあいいや、それよりまずやってみたい事は・・・

「もってみたりして・・・うおっ!?!ミュージシャンっぽい!!--」

すごい!!--私ミュージシャンだ〜!今なら私テレビに出れそうな気がする・・・えへへ〜・・・あっそうだ!それなら・・・

「サ、サインの練習しなきゃ!!--」

「お姉ちゃん、うるさいよ・・・」

唯はいつもど通りの様です・・・・・・・・・・・・・・・・

LIVE 4 ギターを買おう！後編（後書き）

後編終了しました、感想、意見、質問お待ちしております。

ではまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6241z/>

けいおん！あったかい日常

2012年1月3日02時46分発行